



2016年7月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2016年7月  
第107号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久

## 入谷 朝顔市にて



### 目 次

漢点字の散歩（44）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（100）（山内 薫）	9
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	13
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	23

# 漢点字の散歩(四十四)

岡田 健嗣



漢点字版『萬葉集釋注』第四巻が

完成しました(続き)

## 「常体表記」と「詩体表記」

前回に引き続き、『萬葉集釋注』第四巻(伊藤博著、集英社文庫)の漢点字版を読んでの、私の感想を述べさせていただきます。

本書には万葉集巻第七と巻第八が収められています。今回はその中の巻第七の、人麻呂歌について、再度触れさせていただきます。歌の鑑賞は著者の伊藤先生の助力を仰がなければ叶いませんが、妄想を逞しくして、有らぬ方角へはみ出しもしましようが、幾らかの感想に耽らせていただければ幸せに存じます。おつきあいいただければ幸いです。

巻第七の人麻呂歌には、大きな特徴があると言われます。これが「詩体表記」と呼ばれる表記法

で表された歌群の存在で、柿本人麻呂の、表記法の試行の跡を残した歌々であることが推察されます。

「詩体表記」に対して通常の表記法は、「常体表記」と呼ばれます。現在では前者を「略体表記」、後者を「非略体表記」と呼んでいます。本書でも伊藤先生は、この呼び方を使用されておられます。

「非略体表記(常体表記)」とは、表記すべき文字全てを表記するもので、通常の表記と言える表記法です。この表記法は、「雑歌」など、公式の場で披露される歌、あるいは宮廷に献上されるべき歌として作られた歌に用いられていると言えます。

「略体表記(詩体表記)」とは、「非略体表記」とは対照的に、省略できるところは省略するという表記法を言います。具体的には、助詞や助動詞を記さないというものです。この表記法は「相聞歌」のような、ごく個人的な、場合によっては発表も念頭になかった歌に用いられています。現代の私たちがメモやノートを取るときなど

にこんな書き方になることがあります、決して無関係ではないのではと思われます。

左に前回と同様に、「非略体表記」、「略体表記」の順に、人麻呂歌を掲げます。

【非略体表記の人麻呂歌】

一〇九五

三諸就 三輪山見者 隱口乃 始瀬之檜原 所

念鴨

みもろつく 三輪山見れば こもりくの 泊瀬

の檜原 思ほゆるかも

みもろつく みわやまみれば こもりくのは

つせのひはら おもほゆるかも

一〇九六

昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之

香具山

いにしへの ことは知らぬを 我れ見ても 久

しくなりぬ 天の香具山

いにしへの ことはしらぬを われみても ひ

さしくなりぬ あめのかぐやま

一〇九七

吾勢子乎 乞許世山登 人者雖云 君毛不来益

山之名尔有之

我が背子を こち巨勢山と 人は言へど 君も

来まさず 山の名にあらし

わがせこそ こちこせやまと ひとはいへど

きみもきまさず やまのなにあらし

一〇九八

木道尔社 妹山在云 玉櫛上 二上山母 妹許

曾有来

紀伊道にこそ 妹山ありといへ 玉櫛笥 二上

山も 妹こそありけれ

きだにこそ いもやまありといへ たまくしげ

ふたかみやまも いもこそありけれ

【略体表記の人麻呂歌】

一二四七

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見ら

くしよしも

おほなむち すくなみかみの つくらしし  
もせのやまを みらくしよしも

一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与  
我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きた  
らば 我れに告げこそ

わぎもこと みつつしのはむ おきつもの は  
なさきたらば われにつげこそ

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉  
君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし  
袖 濡れにけるかも

きみがため うきぬのいけの ひしつむと わ  
がそめしそで ぬれにけるかも

一二五〇

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮  
妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に  
惑ひ この日暮しつ

いもがため すがのみつみに ゆきしわれ や  
まぢにまとひ このひくらしつ

読者の皆様は、幼少時のころ、小学校に入学して、文字を習い始めたころのことを覚えておられましようか。ひらがなとカタカナ、そしてその次によいよ漢字を勉強します。一年生では約八〇文字の漢字を学びますが、そこで子どもたちは思わぬ壁にぶつかります。

「さあ、それでは文章を書いてみましょう。」先生はそうおっしゃいます。子どもたちは「え、それなに?!」と互いの顔を見合わせますが、よく分かりません。「これまで習った文字を使って、何か書いてみましょう。」先生はまたおっしゃいます。「わかりました。それでは今日は、先生のいうとおりに、書いてみて下さい。」とおっしゃって、短い文章を口頭でおっしゃいます。それを何とか先生のおっしゃるとおりに鉛筆でなぞりますが、それを書き終えたところで先生にお見せすることになります。「これは何ですか?」、先生の指の先には、「でし田」「出

す」などの文字があります。多くの子どもはこの辺りでステップアップを求められます。日本語の文章には、必ずひらがなで書かなければならない部分がある、このことをこうして初めて知ることになるからですし、しかもこのことを、ここでしっかり覚えなければなりません。

しかし一度このことを理解してしまいますと、その後「でし田」とか「出す」とか書いたことなどすっかり忘れて、水や空気の如く、この部分をひらがなで書くのが当然として文章に向かうようになります。しかも現在では、パソコンの力が、自動的に漢字変換と無変換を判断して、ほぼ間違いなく文字を選択できるようになっていて、子どもころのような間違いは、犯したくも犯せない仕組みになっています。

私たちはその後、少し古い文献に触れるチャンスを得ます。現在ひらがなで書いているところが、カタカナで書かれている文章に出会います。漢字とカタカナが交互に出てくる文章で、六法全書などで現在でも容易に見ることが出来ます。またひらがなばかりの文章、古くは平安時代の和歌

集や物語や随筆に、新しいものでは江戸時代の仮名本に出会うことになります。このようなカナ文字の使用法の変遷は、現在使用されている漢字仮名交じり文の成立まで綿々と続いて、やっと百年ほど前に、いわゆる「言文一致体」と呼ばれる文体の成立によって、「助詞・助動詞・送り仮名は、ひらがなで表す」という表記法の確立によって、現代文として整理されたのでした。

しかしはっきりしていることは、漢字とカタカナが交互に出てくる文章（漢文読み下し文）であっても、平安時代の物語や和歌集（仮名文学）であつても、何れ私たちの時代になって、ひらがなで表記することになる。「助詞・助動詞・送り仮名」の存在は、古代の日本語の成立の時点に既に存在していたであろうことが、これらの文字表記から推察できると捉えてよいと思われまふ。文字表記は、一連の音声言語を文として定着するもので、である以上、助詞や助動詞、あるいは活用語尾である送り仮名も、そこに記される必要があつたはずで、その初期の表記が、「万葉集」に見られているはずで

「万葉集」はよく知られるように、「万葉仮名」と呼ばれる独特の仮名文字で表されています。「万葉仮名」とは、漢字を現在の仮名文字のように、音を表す文字として使用しているもので、漢字があたかも「仮名文字」のように使われるところからこのように呼ばれています。私はこの「万葉仮名」は、当時の漢字の音読の音を借りて使用したものとはばかり考えていました。ところがそうではなく、「万葉仮名」には「音仮名」と「訓仮名」の二種あって、それぞれ『広辞苑』には、

《おん・がな【音仮名】／万葉仮名のうち、漢字本来の意味とは無関係に漢字の音（おん）を日本語の音節に当てたもの。多く漢字一字を一音に当てる。「山（やま）」を「也末」と書く類。字音仮名。》

《くん・がな【訓仮名】／万葉仮名のうち、漢字本来の意味とは無関係に漢字の訓を日本語の音節に当てたもの。「懐（なつか）し」を「名津蚊為」「夏櫂」と書く類。字訓仮名。》

と紹介されています。

わが国の文字、日本語を表記する文字は、中国の文化とともに伝来した「漢字」を、わが国の言葉である「日本語」を表す文字として使用したものでした。日本語には、もともと書き表すための文字を持つてはおりませんでした。「漢字」は中国で古代の中国語を表すために開発された文字で、日本語は、それを借りて表すようになったのでした。従って、「漢字」の本来持っている読みは、そのままでは使えません。そこで中国から伝来したときの中国語の読みと、表意文字である「漢字」の意味から、わが国の事物や事柄を表すための日本語の読みの、二種の読みが、一つの文字に与えられることになりました。前者を「音読」、後者を「訓読」と呼びます。

このことそのものが驚きに値するとも言えますが、今回私が、正に遅まきながらではありませんが、「万葉集」について知ったところでは、わが国最古の文献であるこの書籍に、漢字に「音読」と「訓読」という二つの読みをあたえることで、

日本語の表記に適用していることと、日本語の構造として「助詞・助動詞・送り仮名」の存在を明確に類別していることに、強く衝撃を受けたのでした。この「万葉集」はわが国最古の文献であつて、これ以前には、文献としてまとまつた文章は伝わっておりません。どのようなプロセスでこの「音読」と「訓読」が設けられて漢字が受け入れられたか、そして「助詞・助動詞・送り仮名」という日本語に特有の文章構造の発見とその表記の創出がなされたのか、この「万葉集」を辿ることによつてしか想像し得ません。

そこで、右に掲げた人麻呂歌の「非略体表記」と「略体表記」の歌から、それぞれ一首を取り出して、観察してみることになります。「音仮名」「訓仮名」と「訓読」がどのように使用されているか、歌の要素である語句と「助詞・助動詞・送り仮名」が、どのように類別されているかを、見てみましょう。

注 (音) 音仮名、(訓) 訓仮名、(訓読) 漢字の訓読、(読み下し) 漢文読み下し体

【非略体表記の人麻呂歌】

我が背子を こち巨勢山と 人は言へど 君も  
来まさず 山の名にあらし (一〇九七)

「吾勢子乎 (わがせこを)」…「吾(訓) 勢(音) 子(訓) 乎(音)」、「乞許世山登(こちこせやまと)」…「乞(訓) 許(音) 世(音) 山(訓読) 登(音)」、「人者雖云(ひとはいへど)」…「人(訓読) 者(音) 雖云(読み下し)」、「君毛不来益(きみもきまさず)」…「君(訓) 毛(音) 不来益(読み下し、訓)」、「山之名尔有之(やまのなにあらし)」…「山(訓読) 之(訓) 名(訓) 尔(音) 有(訓読) 之(音)」。

「助詞・助動詞・送り仮名」(“ ”で示す) は、  
吾勢子 “乎” 乞許世山 “登” 人 “者” “雖”  
云 君 “毛” “不” 来 “益” 山 “之” 名 “尔”  
有 “之”

【略体表記の人麻呂歌】

我妹子と 見つつ俣はむ 沖つ藻の 花咲きた

らば 我れに告げこそ（一二四八）

「吾妹子（わぎもこと）（訓読）」、「見偲（みつつしのはむ）（訓読）」、「奥藻（おきつもの）（訓読）」、「花開在（はなさきたらば）（訓読）」、「我告与（われにつげこそ）（訓読）」。

「非略体表記」と「略体表記」の人麻呂歌の中から任意に選んで例としてみました。このように原文を見比べるのは私にとって初めての経験ですが、今、言葉を失うほどの驚きを覚えております。

まず「非略体表記」の歌（一〇九七）は、「山」や「人」は訓読していますが、全体として音仮名と訓仮名を駆使した万葉仮名表記で表されています。そして、「雖云」と「不来益」は、漢文の読み下しの方法を採用した表記法です。

ところが「略体表記」の歌（一二四八）は、全てが訓読で表されています。私が衝撃を受けたのはこのことで、全ての漢字が訓読の形で表されているということ、既に現代文に直結する表記法が採られていたということを物語っていると見え

るのではないか、その後の平安期の仮名文学の表記に先立って、漢字仮名交じり文の先駆けの位置を占めるのではないか、そう感じたことによります。誠に遅まきながらこのことを知ることができたことを、私は心から感謝しております。

先にも申しましたように「非略体表記」は「常体表記」とも呼ばれています。この（一〇九七）の歌のような表記法が、宮廷歌人としての人麻呂が採用していた普通の表記法であったということ、これを、「常体」という語で表していることを、ここに来てやっと理解できたということでもありました。

一方「略体表記」は「詩体表記」とも呼ばれています。見た目は「略体」ではありませんが、決して略した表記というわけではありません。他にも丹念に当たって見る必要はありません。（一二四八）の歌のように訓読だけで表されている歌は、決して多くはないのではと推量されます。そうしてみますと、この人麻呂歌の歌群は、それだけで特別な歌ということになります。

この歌は訓読で表されていますが、万葉の時代には、文字と言えはまだ漢字という文字しかあり



ませんでした。もし送り仮名や助詞・助動詞を音仮名や訓仮名で表すしますと、(一〇九七)の歌のように、訓読で表せる語句は、「人」や「山」のようにごく小規模なものに限られるのではなかったか、このように「常体表記」とは、万葉仮名(音仮名と訓仮名)とごく小規模な漢字の訓読、ときに漢文の読み下しを交えた表記法を指している、人麻呂の到達した普遍的な表記法を言う語であったのではということに気づかされたのでした。

(一二四八)の歌は、その意味では誠に新しい試みを示すもので、全てが漢字の訓読で表されている、この文字群は、それまでの万葉仮名とは違った文字だということです。この歌に「助詞・助動詞・送り仮名」を加えるとしみますと、従来の万葉仮名を当てたのでは読みに混乱を生じると考えたからで、取りあえずその部分に何も加えずにおくことを人麻呂は選んだのだと捉えては、間違いであろうか、そう思われてなりません。その意味で「略体表記」は、「詩体表記」と呼ばれたのではないのか、私はやつとそこに気づいて、慄然としたのでした。つまり人麻呂の文字表記の最も先

端的な表記法が、この「略体表記」であったので、もしここに万葉仮名から少し進んだ体系の仮名文字が存在していたならば、現在私たちが当然として使用している表記法である漢字仮名交じり文が、人麻呂によって提出されていたに違いない、そのように思われてなりません。

これまでも私たちは人麻呂の功績を幾つか追ってきました。例えば長歌・短歌という和歌の韻律の確立があります。宮廷歌の形式の確立は、人麻呂以後の歌人たちの歌作には欠かせない道標となつたに違いありませんし、私たちが読み書きしている現代文(詩歌ばかりでなく散文をも)の韻律をも規定しております。そして今回見てきた「詩体表記」は、正に現代日本語文の表記法である漢字仮名交じり文の基底ともなっているように見られます。

こうして私が拙い文章と悪戦苦闘しております、それは人麻呂の掌の上のこと、全てが人麻呂の用意した舞台の上で為されることで、「万葉集」とは、誠に恐ろしい歌集だったのでした。こ

## 点字から識字までの距離(二〇〇)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十八)

二〇一四年に届けた本と

送り先の変更(上)

山内 薫

二〇一四年の一月の本としてKさんから『サザエさんかるた』(赤ちゃんとママ社)の提案があった。『サザエさんかるた』は二種類あり二〇一二年一〇月に復刻されたものと二〇一三年一〇月に復刻された「その式」をそれぞれ一八ずつ送ることとなった。

現地からも

「野馬追文庫、本日届きました。サザエさんのかるた：：みんなで感激しました。早速、週明けから配本させていただきます。入居者の方も懐かしく、かるた取りに盛り上がるのでないでしょうか。」

という便りが届いた。また「南相馬市災害ボラセンブログ」にもカルタをやっている写真が掲載され、

「こちらではカルタで頭の体操、サザエさんかるたで楽しく行いました。」という記事が載った。

二月の本は、一月にも提案のあった『てぶくろ』(エヴゲーニ・ミハイロヴィチ・ラチョフ作

・絵、内田莉莎子訳 福音館書店)に決まった。おじいさんが雪の中に落とした片方の手袋にねずみ、かえる、うさぎ、きつね、いのしし、おおかみ等の動物が次々と入って一緒に暮らそうとする話で、私は「『てぶくろ』はこの時期にぴつたりだと思います。南相馬はあんまり雪が降らないようですが、何か手袋が仮設住宅のように思えます。」とメールした。「たしかに、仮設のようですね。身を寄せ合って、励まし合って：：。なので、二月分は、『てぶくろ』で意見がまとまった。」

三月は何冊かの候補の中から『ちよろりんのすてきなセーター』(降矢なな作・絵 福音館書店)。四月は『はなのすきなうし』(マンロー

・リーフ著 ロバート・ローソン絵 光吉夏弥訳 岩波書店)を送った。

五月は現在までもずっと続けて本をお送り頂い

ている高知こどもの図書館から頂いた、『桂文我落語紙芝居』全六巻六セット計三六巻を三六箇所に送ることになった。(六巻の内容は『さらやしきのおきく』絵・久住卓也、『めがねやどろぼう』絵・東菜奈、『七どぎつね』絵・渡辺有一、『さぎとり』絵・国松エリカ、『とまがしま』絵・田島征三、『うなぎにきいて』絵・長谷川義史)この紙芝居の高知こどもの図書館への寄贈の経緯は「高知市内で、読み聞かせをしていた方(男性)が、震災に心を痛めていて、自分も被災地に行ってお話を読んであげたいと希望されていたそうです。でも当時からご病気で願いがかなわず……。被災地の子どものことを気にかけながらお亡くなりになったそうです。今回、奥様からご主人の遺志を生かしてほしいとこの紙芝居の寄贈になったそうです。」というもので、それぞれの紙芝居には次のようなメッセージを裏表紙に貼った。

「高知には紙芝居が大好きなおんちゃん(おじさんのことです)がいて、大震災以降、いつか実際に東日本の各地で紙芝居をしたいと思っていまし

た。大学は福島県内の大学に進学していたので、福島への思いは格別でした。でも、その願いをかなえる前にガンに倒れ、願いを果たせませんでした。自分(夫)が大好きだった紙芝居を、福島の子どもたちが楽しんでくれたら、それがなによりうれしいことだろうと思つて、今回紙芝居を送らせてもらいました。みんなが喜んでくれますように。MS」

六月分は雨をテーマにした絵本が何冊か候補に挙がっていたが、当時放映されていたNHKの朝のドラマ『花子とアン』の主人公村岡花子が翻訳した絵本『アンデイとらいおん』(ジェームズ・ドーハーティ作 村岡花子訳 福音館書店)か『いたずら きかんしゃ ちゅう ちゅう』(ヴァージニア・リー・バートン作 村岡花子訳 福音館書店)はどうかという話になり、最終的には子どもと一緒に年配の方も楽しんでいただけそうということで村岡花子訳の『赤毛のアン』に決まった。

丁度二〇一四年の五月に刊行された愛蔵版の『赤毛のアン』(講談社)とカラフルなイラスト

の表紙の講談社青い鳥文庫版の『赤毛のアン』を一八冊ずつ送ることになった。「愛蔵版は、装丁のタイトル字やなんとページ周りも金ピカ（お値段青い鳥文庫の三倍）、でも内容は、青い鳥文庫とテキスト・挿絵とも同じ。ルビの振り方なども同じ。行替えなどがほんのちよつと違うところがあつた程度でほぼ同一。ただ、大きく違うのは愛蔵版は、テキストや挿絵の色はセピア色（濃い目の茶色）で目に柔らかい感じでした。これで随分印象が変わっていました。特に挿絵の感じが全然違ふんです。おんなじ絵なのに。」（Kさん）

Yさんは何冊かを読み比べて次のような感想を送って下さった。「『赤毛のアン』のお話が出たので、少し比較して読みました。今どきのせいにか、『赤毛のアン』は、貸し出し中で『アンの青春』で読んでみましたが、村岡訳、掛川訳ではかなり印象が違います。同じ村岡訳でも、出版時期や出版年数によって違いますし、（私が読んだのは講談社訳とポプラ社訳）装丁などによっても印象は異なると感じました。読んでいてすつと頭に入っていくのは掛川訳、しかし細かいところにな

ると村岡訳のほうが丁寧な感じがしますし、アンという主人公のイメージも村岡訳の方がやわらかい印象です。（あくまで私見ですが）いずれにしても、このブームをきっかけに多くの人が『赤毛のアン』シリーズを読んでくれればいいですね。」

Kさんのメール「掛川さんの訳との比較は、やはり訳された時代の影響というのが、あるとは感じています。掛川さんの訳の方が正直今の感覚ではなめらかに読める感じはします。今回は、『赤毛のアン』を送るといふより、「村岡花子」という人に興味を持って、まず本を手にとつて読み始めてくれたなら：：ですね。南相馬図書館にはかなりの蔵書が確認出来、青い鳥文庫の大活字版も所蔵があるようです。」

今回、高知から折り紙のピカチュウと小さなバツク、アンパンマンが送られてきた。

「それでアンパンマンみたとき、保健センターに送りたいくなって（自分の仕事の乳幼児健診の光景が目につかんだのです）、お仕事なのにOさんにお電話してしまいました。前回高知から赤

ちゃん絵本も届いていたので、これも保健センターにお送りしたかったし、南相馬の小児科に前からお送りしたいと思っていたので……。電話の向こうで懐かしいOさんの声。保健センターの他に市内の開業小児科に贈りたいのだけれどと尋ねると、なんと今一軒も小児科開業医は南相馬にいないと……。な、なんと！お一人、老医師が、市立総合病院にかるうじていらして、乳幼児健診もこのドクターお一人でこなしていらっしやるとか……。な、なんと！もともと小児科不足だったのに、震



アンパンマンの折り紙

災後少なかった小児科医は県外へ……。南相馬の乳幼児帰還率が三六%になった、少し数字があがったでしょ？とiiiつつ、Oさん、さみしそう……。私も言葉が上手く見つからず……。アンパンマン折り紙とくぐまちゃんの絵本などOさんのところにお送りしました。」

この一緒に送ったアンパンマンの折り紙が大人気だったようで、Oさんからは次のようなメールを頂いた。

「いつも、お心に留めていただけていて、うれし  
いです。ありがとうございます。絵本もたくさん  
ありがとうございます。午前中に届きました。ア  
ンパンマンの折り紙は、すごいですね。職場のみ  
んなが『おおー』と感嘆の声を上げておりました。」その後、三歳児健診でアンパンマンの折り  
紙を手にした子どもたちの写真も送られてきた。

折り紙を送って下さった高知こどもの図書館の  
Hさんから

「アンパンマンの折紙を喜んでくれている子ども  
たちのすてきな写真をありがとうございます。」

アンパンマンは高知出身のやなせたかしさんの生

み出した、高知自慢のキャラクターです。喜んでもらえてうれしいです。こどもの図書館では開館以来ずっと一五年間、折り紙教室を毎月一度開いています。折り紙教室に毎回来て下さっている方や先生たちも、南相馬市の皆さんのこと忘れたいはしていません。送って下さった写真、教室の皆さんにお披露目させて頂きますね。また何か送れたらと思います。」

ところでKさんから次のようなメールが届いた。「ずっと窓口として一貫して『平らな』姿勢で私たちに向き合い、受け入れてきてくださってきた生活支援相談員主任のRさんが四月一日付で異動になりました。原町の方に移られ南相馬市社会福祉協議会事務局次長兼地域福祉課長として赴任されたそうです。後任は、Tさんという方とことです。私はお名前に記憶はなく、お会いしたことはきつとないと思います。四年目に入り、震災直後のOさん、そのあとのRさんと受けてくださる方あつての支援でした。また違った関係性や展開になるでしょうか：。明日にでもお電話でご挨拶をしてみようと思っております。」

## 「東京漢点字羽化の会」第124～126回

### 例会報告とわたくしごと

木村多恵子

2016年4月の例会(第124回)4月13日(水)

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

新年度に当たり、会費を納めていただいた。

会計報告は5月の例会に行う。

朝日の歴史学のグループ分けを決めていただいた。

5月18日の横浜での印刷を、今回もIさんとSさんが行ってくださることになった。何時もありがとうございます。

学習会の時間設定の変更(これまでより1時間早めて17:30～19:30)、原則として第3土曜日

に決めるようにした。  
横浜からYさんが『萬葉集釋注』の第5巻の後半についてのお話を見えた。

『古語辞典』の質問を受け、入力校正の留意点



を丁寧に岡田さんが説明した。

2016年5月の例会(第125回)5月11日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

5月21日の学習会のサポートをしてくださる方の確認をした。

岡田さんがご用事で5月の学習会は欠席なさるので、木村が予習を兼ねてお話をさせていただくことにした。

6、7、8月の活動日程について確認した。5月18日の印刷もいつものIさんとSさんが行ってください。いつもありがとうございます。

Aさんが機関誌「うか」発送用に沢山切手をご寄付くださった。Aさんありがとうございます。

『朝日「歴史学」』の入力グループを決めた。

いつものように、基本的な記号類、その他入力方法について質問を受け、今回も岡田さんが丁寧に説明をした。

5月21日の学習会は岡田さんのご都合で、出席できなかつたので、木村が予習の積もりで、レ

ズライターで書いていただいている漢字を見ながら、お話しし、テキストを読んだ。

5月20日、岡田さんの母上が亡くなられた。

お通夜は23日、ご葬儀は24日にしめやかに行われた。岡田さんのご意志に従って、中田会長と、田中さんと木村がお通夜にお伺いした。

斎場が木村の住まいに近かつたので、木村は24日のご葬儀にも参列することができた。

2016年6月の例会(第126回)6月8日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

岡田さんは本日、どうしても欠席せざるを得ないご用事があり、お休みされたが、例会は行った。

岡田さんのお母様のご様子について、詳しいことは分からないが、ご葬儀のことなど木村が報告した。

何時ものように朝日の記事入力のグループ分けを決めた。

7月20日の横浜での印刷には、IさんとSさん

が行ってくださると申し出てくださり、このことも安心できた。

I様、S様、何時もありがとうございます。

印刷については、あと何人かいつでもお手伝いしていただける方が多いとよいので、そのことをお願いした。

今日は個人的に自由にお互いに入力その他について訪ね合っていた。

### \* 予告

2016年7月の例会(第127回)7月13日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年7月の学習会(第99回)7月19日(土)

17:30~19:30 ヒューマンプラザ7階

第2会議室

2016年8月の例会(第128回)8月10日(水)

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

2016年8月の学習会(第100回)8月13日(土)

ヒューマンプラザ7階第2会議室

2016年9月の例会(第128回)9月7日(水)

13:30~15:30 ヒューマンプラザ7階

竹芝小ホール

2016年9月の学習会(第101回)9月10日(土)

17:30~19:30 ヒューマンプラザ7階

第2会議室

### わたくしから

親しい友からメールが届いた。

ケイタイに届いたメールは、内容が理解出来たら音声を聞くだけで終わらせているが、書かれている漢字や、初めて聞くカタカナ語などを確実に知るためには、そのメールをパソコンに移して、ペンディスプレイで文字を確認している。

彼女から送られてきた今日のメールは、花の名前についてであった。

彼女と一緒にその花を愛でていたとき、いつもは直ぐに名前を教えてください方なのに、そのときは珍しく自信がなさそうだった。そこで、彼女は改めて調べてくださったのである。



「イングリッシュローズガーデンに咲いていた、水色と薄紫の縦長の花は、やはり〈デルフィニウム〉でした。：

何時も通る花屋さんを覗いたら、な、なんと、デルフィニウムの切り花が出ていました。色は水色と青！

すてきです。」

不思議なことに、わたしはこれまで何度も〈水色〉という言葉を聞いたたり言ったりしてきた。それに漢字の〈水色〉も、実際に何度も読み、書きもしてきた。

けれども、今日彼女からのこのメールは、何故かわたしの全身を震るわすほどの感動を与えた。

一文字一文字たどるわたしの指は、まず〈水〉に触れた。爽やかな、少し冷たい、透明な水が心に浮かんだ。

そして、〈色〉と進んだとき、「ああ、本当に水の色だ！」と思った。透明度の高い清らかな、深い湖を一気に連想した。湖面は波一つ立たない

静かさで、どこまでも薄青い湖の色だった。

が、本当の水の色とはどんな色だろう？

水の化学式は、 $H_2O$ であり、大まかにその性質を言えば、無味無臭、無色透明である。

わたしの「水色」は、透明で、太陽光線が真っ直ぐに湖の底深くまで美しく注ぎ込まれているときの色である。

この底深くといっても、太陽光線が届くのは、せいぜい湖面から2、30メートルの深さまでと聞いた覚えがある。従って曇天では同じ湖でも、このような美しい色にはならないのだ。

この穏やかな湖を思いながら、山崩れが起きる前兆として「土や小石を含んだ濁った水が流れ出したことに気づいたら直ぐ避難すること」という警告まで思い出してしまった。

これは最近沢山の大きな災害を直視せざるをえない今日だからである。

日本国内でも太平洋沿岸と、日本海とでは海の

色は違ふと聞く。ましてやヨーロッパ、地中海に住む人たちが見る水色と日本人が思い描く水色とは異なるのは当然であろう。

人々は自分が育つた環境によつて、火山地帯に住む人、鉾山近くに住む人、砂漠に住む人、それぞれ慣れ親しんだ水や山の色を心に抱き続けていると思う。

銅や鉄、その他様々な鉱物を沢山含んでいる土地に住んでいる人は、側を流れる川の色が赤茶色だったり、緑を含んだ色だったりするだろう。

わたしが思っている水色とは明らかに違ふ。

日本の画家とヨーロッパの画家が持ち寄つた水色の絵の具は互いに相手の色は水色ではないと言ひ争つたという話を聞いたことがある。

その後、互いの齟齬を避けるために明度のようなものを決めて番号を付けたということも聞いた。

現実にはわたしの他に、普通に目が見える友人三人を含めて、四人でおしゃべりをしていたとき、

なんとはなしに、わたしの洋服の色を訪ねた。すると答えは「オレンジがかつた黄色」と言う人、「オレンジ」と言う人、「赤に近いかしら」と微妙に異なる三人三様であつた。もしかしたら三人が教えてくれた色名は、わたしが間違えて覚えてあるかもしれないが、三つの色を聞いたことは確かだ、これはおもしろかつた。

わたしが友のメールから受けた感動は、平穏な日常の証としての水の色、晴れ渡つた穏やかな陽（ひ）を浴びた湖の色を思い出させてもらったことと、そして美しい色を楽しませていただけただけのことである。

近年、自然も、人間社会も、荒れに荒れている。そんな日々から、穏やかな日々に戻して欲しいと、痛切に願つてもいるからである。

山は青き故郷　／　水は清き故郷

と、失われてしまった古里を追慕する、悲しみをもとなう歌ではなく、センチメンタルな感傷でもな

い、日常の平安な古里讃歌でありたい。

最後に子供の頃のことを書かせていただきたい。

まだ色程度は見えた頃である。

姉は黄色のカーディガンを持っていた。その色はきれいだとは思ったけれど、わたしは水色のカーディガンを欲しかった。姉といくつものデパートや小売店を回って探した。水色のカーディガンは何枚もあったが、わたしの憧れの水色はどうしても見つからない。朝から晩までお店が開いているあいだどんなに沢山のお店を回ったことか！ワンピースやブラウスを見ても、わたしが求める水色は見つからなかった。白っぽすぎたり、テカテカしていたり、かと思えば黒っぽすぎたり、くすんでいたりで気に入らない。

当時はお店の蛍光灯の元で見ると、自然光の中で見るのではかなり色合いが違っていたように思う。

上野、浅草と当時は何十軒もお店が並んでい

て、ほとんど全部といっても過言ではないほど見て回った。それでも姉は叱らなかった。これ以上わがままを言えない。また近いうちに探しに連れて行ってとも言えない。何故かわたしは今日買ってもらわなければチャンスはないと思いついてしまつて、一枚を選んだ。が、わたしの不満は収まらず、家に帰っても機嫌はなおらなかった。事情を知らない母から叱られ、もつと不機嫌な夜を過ごした。

その後、わたしの目は色さえ見えなくなつて、今では「これはきれいなピンクよ」「落ち着いた赤よ」と言われると、素直に色も柄も姉に任せている。近頃は色の種類も増えたとし複雑な色合いも出せるようになったというので、今ならわたしの憧れの水色に出会えるかもしれない。あるいは永久に見つけることはできないのかもしれない。心に作り出している「わたしの水色」と「わたしの紺」と、わたしの「真冬の夜の美しい深い空の青」はわたしだけのものなのだろう。

2016年7月6日（水）

竹里館 王維

独坐<sup>ス</sup>幽篁<sup>、</sup>裏

弹琴復長嘯

深林人不知<sup>ラ</sup>

明月来<sup>タリテ</sup>相照<sup>ラス</sup>



参考図書 渡辺精一『朗読してみたい  
中国古典の名文』祥伝社新書)

竹里館 ちくりかん 王維 おうい

独坐<sup>どくざ</sup> 幽篁<sup>ゆうこう</sup>の裏<sup>うち</sup>

弹琴<sup>だんきん</sup> 復<sup>また</sup> 長<sup>ちやうしやう</sup> 嘯<sup>しやう</sup>

深林<sup>しんりん</sup> 人<sup>ひと</sup> 知<sup>し</sup> らず

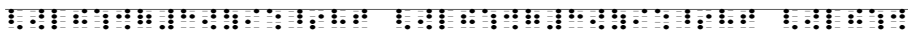
明月<sup>めいげつ</sup> 来<sup>き</sup> たりて 相照<sup>あいて</sup> らず

幽篁|| 幽は奥深いこと。篁は竹林。  
相照|| 「相」は対象に対して動作・  
行為を行う。光を投げかける。

盛唐の詩人・王維（七〇一〜七六一年）  
は、絵画や書・音楽にも秀でる多才なエリ  
ト官僚でもあった。

輞川<sup>もうせん</sup>（長安の南）にある山の麓に二十もの  
施設や名勝のある別荘を持ち、「竹里館」や  
「鹿柴（ろくさい）」もそのうちの一つである。

余暇には宮廷生活を離れ、琴を弾き、詩を  
吟じ、自然の中での自適の生活を楽しんだ。



竹里館

王維

独坐ス幽篁ノ裏

弹琴復長嘯

深林人不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>ラ

明月来<sub>レ</sub>タリテ相照<sub>レ</sub>ラス



### ★『草枕』にも引用された王維の「竹里館」

漱石の『草枕』の中で、陶淵明の「菊を採る  
とうりもと  
東籬の下」の詩とともに、「竹里館」の詩  
が引用され、賞賛されている。

……ただ二十字のうちに優《ゆう》に別乾坤《べつけんこん》を建立《こんりゅう》している。この乾坤の功德《くどく》は「不如帰《ほととぎす》」や「金色夜叉《こんじきやしや》」の功德ではない。汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後《のち》に、すべてを忘却してぐっすり寝込むような功德である。

……こうやって、ただ一人《ひとり》絵の具箱と三脚几《さんきゃくき》を担《かつ》いで春の山路《やまじ》をのそのそあるくのも全くこれがためである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間《ま》でも非人情《ひにんじょう》の天地に逍遥《しょうよう》したいからの願《ねがい》。一つの酔興《すいきょう》だ。

(インターネット図書館『青空文庫』より)

\* 漢点字羽化の会では、上記のようなルビ付きのテキストファイルを利用して、青空文庫からの点訳も行っています。

## 「報告と」案内

### 一 『萬葉集釋注』第五卷

前号でご報告致しましたように、横浜漢点字羽化の会では、二〇一二年度から昨年・二〇一五年度までの四年に渡って、滞ることなく『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫、全一〇巻）の漢点字版を、第一巻から第四巻まで、毎年一巻ずつ製作して、横浜市中央図書館に納入して参りました。漢点字でわが国の古典を製作するという、本会の活動の一つの目標に、一歩近づいたことは間違いないと思います。このことは、本会の会員の皆様の、言葉に尽くし難い、弛まぬ活動の積み重ねと傾注された努力の賜に他なりません。併せて本会の活動をご支援下さっております賛助会員の皆様と、本誌の読者の皆様、そして同書をお受け入れ下さっております中央図書館様の、暖かいご理解とお志の賜でもございます。心より感謝申し上げます。

本会では本年度も引き続き、同書第五巻の漢点



字版の製作に勤しんでおります。第五卷には、万葉集卷第九と卷第十が収められております。ここにも新たな発見が待ち受けているかもしれない。

視覚障害者にとっては全く未知の分野であるわが国最古の文献に、このように触れることができます。これは、この上ない幸いと、感謝の念で一杯でございます。誠にありがとうございます。

### 二 『岩波古語辞典』

東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』（大野晋ほか編）の漢点字訳に着手しております。入力 of 最先端は、既に半ばを過ぎました。

完成の暁には、パソコン用のEIBファイルでご提供する予定です。横浜で制作中の『萬葉集釋注』と同様に、古典に触れるための貴重な資料となるに違いございません。

視覚障害者の高学歴化は、この二、三〇年のうちに激しく進みました。しかしこの国語の分野では、果たしてそれに見合った常識を、身につけることができているのであろうか、と危慮されるの

ではないでしょうか。  
ご期待下さい。

### 三 訂正、「価格差補償制度」

前号で、本会製作の漢点字書を購入する際、日本漢点字協会にご注文いただければ、「価格差保障制度」がご利用いただける旨申し上げましたが、「保障」は誤字でした。正しくは「補償」です。謹んで訂正させていただきます。

「価格差補償制度」とは、視覚障害者が点字書を購入する際、その原本の活字書の価格と同額のご負担で購入できる制度です。差額は、公費から支出されます。

有意義にご利用下さい。

### 四 EIBファイル

本会製作の漢点字書は、EIBファイルというファイルの形式でご提供できます。無料です。

EIBファイルは、著作権の保護を目的として開発しました。KGS製のピンディスプレイに表示して、漢点字を触読することができます。

EIBファイルを読むには、専用のEIBRK WRというプログラムが必要です。これも無料でご提供致します。

『常用字解』、『萬葉集釋注』等、ご利用をお待ち申し上げます。

《23ページ「編集後記」から続く》

しまいました。「ワード」はそもそも英語圏で開発されたもので、設計の思想が英語的になっていきます。根本的な相違は、英語が単語単位で文章を組み立てているのに対して、日本語は文字単位だということですが。ワープロソフトの開発に際して根本的な設計思想が異なるので、どうしても日本語入力用に改造した「ワード」は、日本人には使いにくいということです。

当然ながら、私はこの「一太郎」を使って当誌を編集していますし、これからはずっと「一太郎」を愛用していきたいと思っています。「一太郎」が消えてなくならないように、その利用者が少しでも増えていくよう、祈るのみです。

木下 和久

## 編集後記

本号はちよつと原稿の量が少なかつたので、本文のフォントサイズを大きくして

(従来の10ポイントを11ポイントに)、1ページ文字数を減らしました。このほうが読みやすいものと思われます。しかし、原稿量が多いときはページ数をあまり増やしたくないということから、フォントサイズは小さめで、行間隔もだいたい詰め込むことになりました。用紙を何枚仕立てとするか、フォントサイズをどうするかなどを決めるのは編集技術のうちですが、最近のワープロソフトの進歩で、昔に比べたら非常に便利になっていることは、編集者にとって嬉しいことです。

ワープロソフトといえ、以前は「一太郎」と「マイクロソフト・ワード」がそれぞれに大きな勢力を保って、ほぼ互角に戦ってきたもののように思いますが、最近では「一太郎」をプレ・インストールしたパソコンが見かけられなくなつて (22ページへ続く)

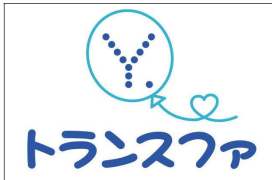
## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: [www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。